

図書館だより

'94. 12

子猫の贈り物

伊藤明美（一般教育・英語）

「家にはサンタさん来ないの?」「サンタ? そんなのいるわけないでしょ! あんたたち」小学一年生だった私と、4才の妹のクリスマスへの憧れが無残にも打ち砕かれた瞬間である。極めて現実的、非西洋的、かつ日々の生活に追われていたこのような母に育てられた私達姉妹は、それ以来世間の子供たちのように、靴下を枕元に置いて眠りにつく楽しみを一度も経験したことがない。

アメリカで暮らしていた頃も何度かクリスマスを経験したが、この祝日が重要な意味を持ち、



目 次

子猫の贈り物

伊藤明美

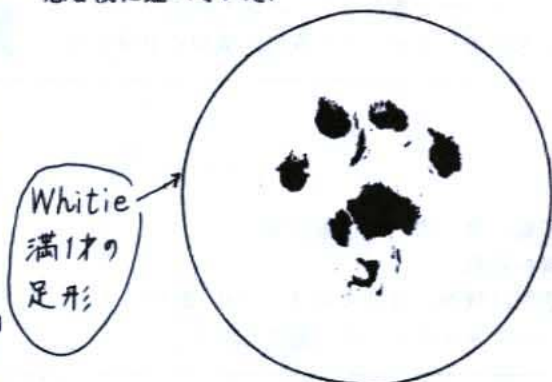
また家族そろって祝うという習慣がすでに生活の一部として切り離せないアメリカ人のクリスマスに対する感覚と、信者でもない日本人（それも前述のような環境で育った私であればなおさら）のそれとはやはり何か大きく違っているように思っていたものである。しかしこんな私でも12月25日が決定的に心の中に刻みこまれた年がある。それは1982年のことで、この時の気持ちを理解してもらうためには、当時の生活について触れなければならないので、以下に私の「古き良き留学生時代」について少し述べたい。

こんなことを書くと、戦争体験をなさっている方々にお叱りを受けるかもしれないが、私はとても貧乏だった！………と思う。お金がないので電気、電話料金などの支払は常に遅れ、車はおろか自転車すら買えないので、食料の買い出しのために、旅行用スーツケースを片手にいつ来るかわからないバスを摂氏40度近い炎天下で待った。また今では笑い話になってしまったが、あるハンバーガー屋で友人とコーヒーを飲んでいたら、80才くらいの老女が静かにほほえみながら、1ドル紙幣を私の右手の中に押し込んだこともある。茫然としていた私を尻目にこの老女は、「私は人助けが好きなのよ」と皆に聞こえるように独りごとを言いながら店を出て行ってしまった。さらに帰国した時、アメリカから持ち帰った衣類を整理していたら、愛用していた普段着の類を指して妹が、「なんでパジャマばかりあるわけエ」と聞いた。

このような経済状態であったので、私は積極的に(!?)働かざるをえなかった。ご存知の方もあろうが、学生ビザを持つ留学生は特別の許可がないかぎり、大学外で働いてはならないというきまりがある。従って私が「働いた」というのは(時効だと思うので書くが)、実を言えば「内緒で」、もっと端的に言うと「不法で」という副詞がつかなければならないものであった。入国管理局に見つかれば、最悪の場合は強

制送還となる(だから学生の皆さんは真似をしないで下さい)のだから、いくら生活がかかっているとはいえ、私の心理状態はおだやかではなかった。一年半ほどたつて、入管の係官をなかば押し切った形で特別就労許可をもらうことになったが、それまで私が抱えていたストレスは、不法入国、就労を繰り返していた知り合いのメキシコ人などより、よほど高かったように思えた(実際この知人は全く悪びれる様子もなく、「俺たち一家は山越えがうまいのさ」と笑って自慢していた)。

余談になるが、私の夫はビザが切れていたのをすっかり忘れて旅行中、カリフォルニアとアリゾナの州境で入管の検問にひっかかり、真夜中だったこともあって、一晚留置場で大勢の不法入国のメキシコ人と過ごしたことがある。係官にあれこれと質問(訊問と書くべきか)をされ、10本の指すべて指紋をとられた後、「腹は空いていないか。何か食いたいか。」と聞かれた。この時彼は、日本のテレビの刑事番組ではこういう場合「カツ丼」が出てくるが、アメリカではどうなのかという熱心な研究心(!?)を触発され、実を言えば精神的な動揺のため、空腹感など皆無であったはずなのに「はい、お願いします。」と頭を下げたそうだ。さっそくハンバーガーとサンドイッチの選択肢を与えられ、「俺は感激した」などと意味のわからぬ感想を後に述べていた。



話をもとに戻す。とにかく入管に足を向けて寝ていられなかった1982年の12月24日、静まり返ったキャンパスでふと、友人たちが皆家族のもとに戻ったという現実気がついた。そしてそのことが私の切迫した経済状態をさらに悲しませ、また両親の反対を振り切ってまで来たアメリカで、いったい何をしているのだという激しい自己批判を呼び起こした。自然に涙が出てきて、それまでは味わったことのない「ホームシック」という感情に襲われた（若かったですね！）

しかし、である。沈んだ気持ちで帰りかけたその時、生後一ヶ月くらいのそれは美しい白い子猫が私にまわりついたので（私は元来動物がとても好きだ）。さかんに鳴いて後を追ひ、抱き上げると安心したように、青く大きな目で見つめた。その愛らしい顔が心の中にしみいって、私はなんだか急にボカボカとした気持ちで満たされていったのだった。しかし道に迷ってしまったらしいことは明らかであったので、飼い主が探しに来たら返さねばならないと思い、小一時間ほど待ってみたが、結局それらしい人物はあらわれなかった。そして、今考えると全く身勝手であったが、この時点で私は、この子猫が私のために用意された神様からの贈り物であると思い込んでしまった。



この猫は強く、賢く、美しく成長し、近所では名の知れた親分猫に成長し、私にとっても、決して短くはなかったその後のアメリカ生活におけるかけがえのないパートナーとなったのである。

毎年この時期になると、友人に送るカードの文面や贈り物を考えるが、そういうときは必ずといってよいほど、この猫との出会いや思い出が脳裏に浮かび、いつになく（！？）やさしい気持ちになっていることに気づくのである。だから、「猫は神様からの贈り物だったに違いない」とは夫の弁でもある。

皆さんもどうぞ素敵なクリスマスをお迎え下さい。



夏休み中の資料移動から、3ヶ月余りが経ちました。今まで館内にあった本が別置室にいらしてしまったり、館内の本の配置が変わっていることに随分とまどった方も多いかと思ひます。

別置室にある本も、館内の本と同じように、借りることも閲覧することもできます。ご覧になりたい方は、目録カードで分類No.、登録No.そして書名をお調べの上カウンターにいらして下さい。係が本をお持ちします。

別置室の利用は5:00 PM までです。なお、11:00 AM ~ 1:00PM はすぐに対応できない場合もあります。）

皆さん、どうぞご利用下さい。

クリスマス
プレゼント

退屈は

精神の自由の妨げ

LOVE 康子

高校生の頃演劇が大好きだった私は、当時盛んだったアンクラ演劇や暗黒舞踏をよく見に行き、時には新宿の裏通りを小さな劇場を探して歩き回ったものだった。今思い出すと少々危険なことをしていたと思う。赤テントで有名な状況劇場が爆発的な人気を得て上野の不忍池公園に毎日整理券を求める観客の長蛇の列ができるようになる少し前のことだった。今や若者の、いや中学生の街となってしまった観のある渋谷もその頃はまだ比較的静かな繁華街で、今パルコがある場所が広い空き地になっていた。そこに赤いテントを張って状況劇場が芝居をやっていた。もちろんスペイン坂など気配もなかった頃だ。

そこで初めて見た状況劇場の芝居は「少女仮面」で、観客は確か50人ぐらい、テントもまだそれほど大きくはなく、大入りだといって唐十郎をはじめ座員たちは大はしゃぎだった。主役の腹話術師を新人の根津甚八が熱演していた。高校生だった私とその芝居にすっかり魅了されてしまって終演後もしばらくその場にたたずんでいると、舞台裏から根津甚八が出てきて、もうほとんど人のいなくなった観客席の真ん中に洗濯物を干したのを覚えている。さっきまで舞台上にいた狂気と悲劇の腹話術師がのんびりと洗濯物を干しているのが何かとても不思議な現実ばなれした光景のように思えたものだった。

映画も大好きで、時には学校の授業をさぼって三本立ての映画を見に行っていた。感激して座席

からしばらく立ち上がれなかったのはピーターブルックの「マラー・サド」。これももとはといえば舞台上で上演された芝居を同じキャストで映画化したものだった。

お決まりの受験勉強をして都立大学人文学部に入学した私は、ある程度予想はしていたもののあまりにも刺激のない退屈な大学に深く失望した。一体何が面白くてやっているのだろうかと言いたくなるような授業……。時代の流れも関係していたのだけれど、教師も学生も周囲に無関心で新しいものが生まれる気配など無く、全く好奇心を刺激されない私はイライラする毎日を過ごした。

退屈は精神の自由にとって大きな妨げとなる。大学の薄い空気によってジワリジワリと窒息し、まるで生きたまま身体が腐っていくような気持ちにした私は思い切って自分のやりたいことをやることにした。これが私が舞踊を始めたいきさつだ。本当に続けていく決心をするにはその後数年かかったが、どうやら自分は舞踊家だと言えるところまでになった。大学は九年(!)かかって卒業したが一度も就職したことなど無く、私は社会の言わばアウトカーストの道をプライドを持って歩き続けてきた。

LOVEさんには、数多くの芸術関係の図書・雑誌を寄贈していただきました。

残念ながら、まだ皆さんの目に触れることがないのですが、書架に並ぶようになると、随分芸術系の分野も充実することと思われます。

この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

フェアネスがもうすぐ誕生します。
いま図書館は静かに変革を進めています。

「フェアネス」って何ですか？

フェアネスは、いま図書館で進めている電算化計画によって実現するネットワーク・システムの名称です。フェアネスは英語の FAIRNESS にも通じる愛称で、Fuji Academic Information Resources & Network Service System のことです。これは図書館の業務の電算化に止まらず、このネットワークを利用した様々なサービスを可能にするものです。現在、その平成8年度デビューに向けて準備作業が進んでいます。

フェアネスは規模は大きくありませんが、受入システム・目録システム・閲覧システム・ILLシステム・電子メールシステムから構成される図書館総合システムです。

S 受入システム（開発済）

本学独自のシステムで、学術情報センターの目録情報を利用して、図書の発注を行い、業者納品や登録作業のスピード・アップを図っている。

S 目録システム（導入済）

富士通の図書館システム（ILIS-WR）を導入して、学術情報センターの共同目録作成と図書館のデータベース作成を行う。NACSIS-IRでも平成6年4月以降に受け入れた本学の蔵書検索が出来る。

S 閲覧システム（準備中）

ILIS-WRの閲覧システムを平成8年から導入する予定で、平成7年度には利用者ファイルの作成を行う。完成すると、貸出・返却のコンピュータ処理が実現する。

S ILLシステム（検討中）

学術情報センターのオンライン相互貸借システムで、他館の資料の利用のスピード・アップが図られる。

S 電子メール（検討中）

学術情報センターの提供するメールサービスで平成8年度以降に研究室端末からも利用出来るよう計画している。

フェアネスで図書館はどう変わるのですか？

フェアネス計画は、年次計画で段階的に完成します。今年度は、図書館にある資料のデータを作成しています。同時に、図書のバーコード・ラベル貼付作業を進めています。

次に、平成7年度は、雑誌の受入・製本システムを導入します。これが完成すると、新着雑誌の受入れ状況がカウンターでわかります。

さらに平成8年から閲覧システムがスタートします。貸出・返却のコンピュータ化が図られ、目録カードに代わるものとして、皆さんが直接コンピュータ端末を使って、必要な資料を探すことが出来るようになります。これをOPAC（オーパック）と呼んでいます。目録カードでは、書名や著者名等の読み・分類が主なキーワードでしたが、ISBN・出版社・出版年なども加わり、その探索手段は、はるかに豊富になります。

さらにフェアネス計画には、コンピュータ・ネットワークという新しい情報技術の環境が備えられています。例えば、北16条と花川の両キャンパスがオンラインで結ばれていますから、皆さんは両方の図書館の所蔵資料や貸出状況を同時に見る事が出来るようになります。

さらに新しいサービスとは?

従来なかったサービスが受けられるようになります。「インターネット」というネットワークが、北海道大学や学術情報センターと結ばれていますから、北大に限らず国内の大学・研究機関でもつ資料の所在情報を得ることができます。また各機関が開放しているオンライン・サービスを利用することも可能になります。さらにこのインターネットは世界中のコンピュータ・ネットワークとも結ばれていますから、「電子メール」による情報交換が可能となります。

サービスは、平成8年から!

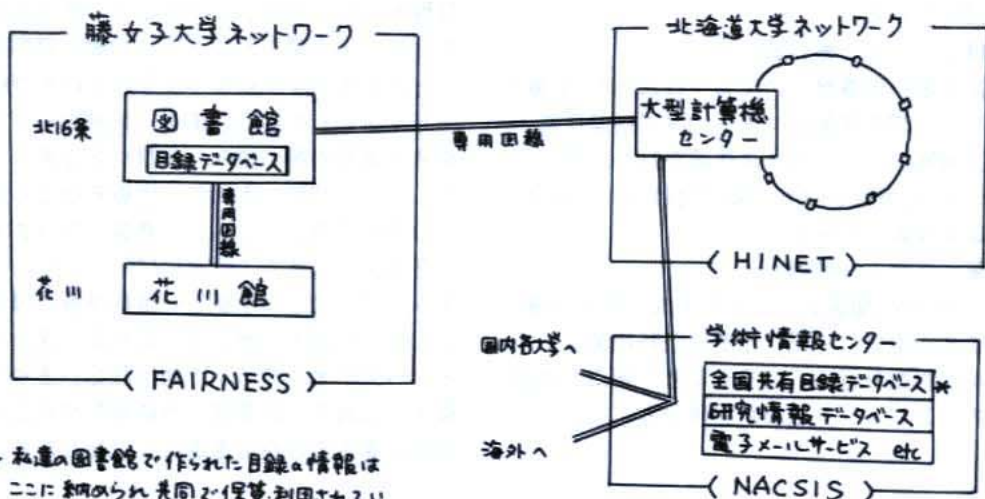
現在は、両キャンパスのカウンターに各1台端末が置かれているだけなので、皆さんが実際に利用できるようになるのは、平成8年度からです。ただ、すでに新着リストはこのシステムによって印刷されています。また目録データベースには、蔵書23万冊のうち約18万冊のデータが入力されました。新着図書はすべてこのデータベースから打ち出されたバーコード・ラベルと請求記号ラベルが貼られているのにお気づきと思いますが、既存の図書についても順次貼られています。

おわりに

さて今回は、図書館で進めている「フェアネス」計画についてご紹介しましたが、図書館業務の電算化の始まりは省力化とよりきめの細かいサービスの実現です。しかし、全てをコンピュータがやってくれるわけではなく、また何でも電算化することが理想でもありません。現在は、この移行過程にあつて目録カード編成の停止などむしろ皆さんに不便をおかけしていると思いますが、一日も早くよいシステムが完成するよう館員一同頑張っていますので暖かいご支援とご協力をお願いします。

フェアネス計画のあゆみ

- 平成5年 8月 藤学園理事会で電算化計画の承認。
 平成5年12月 北16条校舎と花川校舎にイーサネット・ケーブルを設置。学術情報センターと接続し分担目録の編成作業に参加。
 平成6年 4月 図書の発注システム・目録システムを完成。蔵書データの作成開始。



* 私達の図書館で作られた目録の情報はここに組み入れ共同で保管利用されています。

花川館 春夏秋冬

一年毎に学年が揃う花川キャンパス。花川館の様子も、一年一年が少しずつ違います。3年が経とうとしている花川館。四季折々を(まわりの自然と共に)お知らせします。

春、4月。長かった花川の冬もやっと終り、ようやく木々が芽を吹き始める頃、図書館では新入生(17-30)の準備で大忙しです。新入生が少しでも図書館を利用しやすいようにと、館員一同、頭をひねります。在生も進級して、それぞれ新しい目標を持って図書館にやってきます。館員も気持ちを新たに作る季節です。5月、カッコウが鳴き始めると、1年生も本を借りに来る人が増えてきます。やはり、初めての人が借りに来てくれるのは嬉しいものです。そして、6月。アカシヤの花が咲き、「お隣のいちごもそろそろ食べ頃かしら。」とそわそわし始める頃、スーツ姿の学生さんも目立つようになり、図書館も活気を増してきます。

夏。緑が眩しいこの季節。花川館には自慢の(?)冷房が入ります。今年の、うだる様な暑さの中、いちばんおいしい思いをしていたのは、私たち館員かもしれません。7月に入ると楽しい夏休み前の試験、試験がありますね。カウンターもこの時期は、貸出・返却・更新がいつもの倍近くに増え大忙し。館内は、勉強にいそしむ人、たまたま涼みに来る人で、あっという間に席がいっぱいになります。ここはどこ?と思うほどの大にぎわい。静粛に。静粛に。そして夏休み。…静かな図書館に戻ります。家にいるより涼しいからと、ゆっくりと本を読みに来る人、レポートを仕上げる人、ビデオを観に来る人などと、夏休み中の図書館はゆっくりと時が流れている様な気がします。



大学の秋の一大イベントと言えはば「藤花祭」。花川館も昨年より参加。一般公開します。大型資料(衣装、料理、美術書など)や本学の刊行物などの展示、藤ツアー参加の高校生達に館内の案内などをします。一般の方々も多数見学に来られ、館内や資料をゆっくりとご覧になって行かれます。展示の中で一番の人気は卒業アルバム!お姉さんが写ってる、という声が聞こえたり、アルバムを見ながら懐かしそうに話している卒業生や、熱心に(?)見ている男子学生の姿が見られます。やはり、卒業アルバムの撮影の時には力が入りますね。にぎやかだった藤花祭も終わり、秋も深まる頃、外見のみならず内面も美しく磨く努力に余念のない皆さんで、図書館には、再び活気と落ち着きが戻ります。

冬。朝の通勤、通学がツライデスネ。寒い中をなかなか来ないバスを待ったり、まだ除雪されていない道をかきわけて校門まで歩くことも、そんなことにはめげてはいられない、ハイ、後期試験がありますね。カウンターでは前期試験期と同様、館員5名、一家総出で対応することもあります。いつもより焦り気味で本の所在を尋ねたり、調査の依頼をする人、閲覧席では外の吹雪を気にも止めずに、熱心に勉強する姿が見られます。(アトガナイ、という気迫が…)試験を乗り越え、冬の厳しさを乗り越え、手稲山の雪解けを、閲覧室の窓から待ち望みます。

ご存知ですか？ 地方出版

皆さんは、“地方出版”という言葉を目にしたことがありますか？
地方出版とは、読んで字のごとく地方で出版された出版物のことです。
日本の出版業界のメッカである東京以外の地で出版されたものが、普通地方出版物ととらえられています。
今回は、皆さんがあまり気にとめていなかったのではないかとと思われる地方出版物に少しアプローチしてみたいと思います。

地方出版物は出版された地方と縁のあることを主題として取り扱ったものが多いです。

<主題は？>

その土地の風物、歴史、産業、芸術、伝統、又、郷土の偉人伝などが挙げられます。

<盛んな地域は？>

北海道、東北、特殊な戦争体験を持つ沖縄などは地方出版の盛んな所だと言えます。又、島崎藤村、堀辰雄らを代表とする文学者との結びつきの深い長野も地方出版物では有名な所です。

<有名な出版社は？>

無明舎出版<秋田> 銀河書房<長野> 北海道新聞社<北海道> 葦書房<福岡> etc.

藤でも最近、随分地方出版物に目を向けて収集に力を入れています。地元ならではのエピソードをのぞける、作家の故郷や文学活動に多大な影響を受けたと思われる土地での出版物。その他、動植物や風景を収めた写真集も藤では収集の対象としています。

では、北海道にスポットをあてて、何点か紹介してみましょう。例えば、有島武郎…

星座の会シリーズ(2) 有島武郎の札幌の家
前川公美夫著 星座の会 1987
[913.6/A76s/2]

星座の会シリーズ(5) 愛の書簡集 有島武郎から
アイダ・アックハ 高山亮二編 星座の会 1993
[913.6/A76s/5]

有島武郎試論 田辺健二著 溪水社 1991
[913.6/A76t]

写真集では…

小樽／運河と港の風色 写真集 山口八壽夫作
財界さっぽろ [748/Y24]

北大の四季 高嶋英雄著 北海道大学図書刊行会
1991 [748/Ta54]

などがあります。

一般的に、大手の出版社を通すには、採算の合わないものが、地方で出版されているようにとらえられています。しかし、きめの細かい、地元ならではの持ち味を生かした資料が、大手のものとの補いきれない部分をフォローしていることも見落とせません。

最近の新着書にも、地方出版物がちらほら顔見せしていますが、これを機に手にとってみてはいかがでしょう。



10月13日の出来事



10月13日、ノーベル文学賞が、大江健三郎氏に贈られたというニュースが、世界中を沸かせました。

これまで彼の貫いた意志というのは、戦後の重い社会問題—核・平和・福祉—を問い続けることでした。日本文学には質の高い作品が溢れるほど存在しているのに、特に彼の作品に艶を感じるのはなぜでしょうか。それは、彼の生きる姿勢が、障害をもって生まれてきた長男・光との出会いを契機に、人間を励ます小説へと変化していったことにあると思います。彼の作品に触れると、学生から若い世代の揺れ動く心情・被爆地ヒロシマの平和への願い、そして障害を持つ父親の苦悩が、核となっていることを感じていただけるでしょう。

世代を超えて、世界の共感を得る彼の小説を何冊か読まれたことがあるかと思いますが、多方面から、奥深くまで大江氏のことを知りたいと思う学生さんたちも少なくないと思います。

そこで、図書館に所蔵する資料の中からわざわざではありませんが、紹介したいと思います。

死者の奢り 大江健三郎著 文芸春秋新社 1958
[913.68/A39/39]

個人的な体験 大江健三郎著 新潮社 1964
[913.6/069]

同時代が—A 大江健三郎著 新潮社 1979
[913.6/069]

群像日本の作家 23 大江健三郎 マサオヨシミほか著
小学館 1992 [910.26/G94/23]

大江健三郎の世界 一條孝夫著 和泉書院 1985
(現代作家の世界3) [913.6/069i]

大江健三郎論—未成の夢 川西政明著 講談社
1979 [913.6/069k]

国文学(学燈社) 35巻8号 1990

すばる(集英社) 11巻2号 1989

(他にも沢山ありますので、もっと知りたい方はカウンターまで)

中でも、「群像日本の作家 23」の98頁と103頁を読んでいただくと、渡辺一夫氏と伊丹十三氏の語りで大江氏のソフトな一面を垣間見ることができると思います。



地方出版された本 最近の新着図書からピックアップしてみました。

- ・都市の迷路：地図のなかの荷風 叢書L'esprit nouveau 11
石阪幹将著 京都；白地社 1994 [913.6-N14i]
- ・浦上・揺れながら：被爆四十五年目に
小柳恵美子著 福岡；葦書房 1990 [913.6-Ko97]
- ・花あしび 堀辰雄著 札幌；札幌青磁社 1946 [914.6-H87]
- ・八幡平散歩：カメラスケッチ 坂東右近著
盛岡；熊谷印刷出版部 1994 [748-B18]

おしらせ

P5～6でも紹介しましたように、貸出・返却業務の電算化のため、夏休みからバーコードの貼付作業が始まりました。通常開館の時はなるべく避け、休み中に集中的に作業を進めていく予定です。

利用者の皆さんに不便をおかけするかと思いますが、ご了承下さい。

新しい購入雑誌が入ります…

<本館>

- ・風<アネウマ> (風編集室)

<花川館>

- ・お母さんのレストラン 美しい部屋別冊 (主婦と生活社)
- ・私の手作り 美しい部屋別冊 (主婦と生活社)
- ・ダ・ヴィンチ (リクルート)
- ・栄養・食生活情報 (日本栄養士会)

花川館には、こんなビデオも入ります…

- ・カサブランカ
- ・羊たちの沈黙
- ・風と共に去りぬ
- ・ボンヌフの恋人
- ・ジュラシックパーク
- ・私の中のもうひとりの私 etc.

本館の方も花川館から取り寄せて利用できます。ただし、館内利用に限ります。

卒業学年の皆さん…

藤では、卒業生の方も図書館を利用できます。本の閲覧・貸出しずれもO.K.で、条件は学生さんと同じです。卒業しても、使い慣れた藤の図書館をどうぞご利用下さい。来館の折に、身分証明書 (運転免許証、保健証 etc.) をお持ちいただければ、カウンターで手続きいたします。

冬休みの図書館

<開館日>

12月16日(金)～12月21日(水)
1月9日(月)～1月14日(土)

<開館時間>

9:30～16:00 (土は12:30まで)

<閉館日>

12月22日(木)～1月7日(土)

長期貸出は12月9日(水)より開始します。
なお、12月16日から冊数を一人10冊までとします。



藤女子大学 図書館だより 第46号 1994.12.10
藤女子短期大学

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館

TEL 011-736-5405 FAX 011-709-4770